

7 学習評価と評定

1. 学習評価の考え方

学習評価とは、児童生徒の学習状況を目標（何ができるようになるか）に照らして振り返り、成果（何が身についたか）を確かめるとともに課題を明らかにし、児童生徒の学習改善につなげるために行うものである。また、児童生徒の評価から授業を見直し、教育内容（何を学ぶか）や学習・指導（どのように学ぶか、どのように支援するか）の改善につなげることをねらいとしている。

指導・評価は目標・内容に準拠して行われるものであり、「指導と評価の一体化」が求められている。今改訂では、目標及び内容を求める資質・能力の3つの柱「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」で再整理されたことに準じ、観点別学習状況の評価の観点も「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つに整理された。このうち、「学びに向かう力、人間性等」については「主体的に学習に取り組む態度」として観点別学習状況の評価を通じて分析的に見取ることができる部分と、個人のよい点や可能性、進歩の状況について評価する「個人内評価等」を通じて見取る部分があることに留意すること¹⁾が示された。

また、学習評価の方針を事前に児童生徒と共有しておくことは、「評価の妥当性・信頼性を高めるとともに、児童生徒に各教科等において身に付けるべき資質・能力の具体的なイメージを持たせる観点からも不可欠であるとともに児童生徒に自らの学習の見通しをもたせ自己の学習の調整を図るきっかけとなる」²⁾とし、奨励されている。

学習評価には、教師によるもの、生徒によるものがある。学習過程に応じて、学習の目標を具体化するために生徒の学習状況を診断的に評価する「診断的評価」、学習の推移を知るために毎時間の評価を積み重ねていく「形成的評価」、単元前後の学習状況を比較し、単元の成果と今後の課題を評価しまとめる「総括的評価」がある。1単位時間の学習においても同様に一連の評価を行う。学習は教師の授業構想、指導の反映である。教師は目標を明確にし、実態に則した学習計画・評価計画

をデザインして、教師による評価結果と生徒による評価結果を総合しながら改善を図っていききたい。

2. 教師による学習評価

教師は単元や1単位時間の授業を通して絶えず「見取りと評価」を行う。学習目標の設定は適切であるか、目標を実現する上で学習活動は適切であるか、協力して互いに高めあえているか、課題の解決は成果をあげているかなど、見取りの視点をもって学習を捉え、評価し改善する。

1単位時間の「はじめ」には、学習カードの記載例を紹介するなどして、生徒から見た学習状況を評価し本時の目標を導く。学習の「なか」では、できるだけ1人ひとりの学習状況を観察し、よさを認め賞賛する。つまずきがある場合にも、直接関わって問いかけ、フィードバックやアドバイスを与える。表1に示すように、絶えず生徒に肯定的に共感的に関わり、具体的な評価と支援を返すことが大切である。1単位時間や単元の「終わり」には「評価とまとめ」を行う。目標の達成状況や生徒の意欲を引き出す情報をクラス全体に伝えるようにする。こうして確認されたれた所見は学習記録簿に記録する。

他方、教師は生徒による評価を学習カードの記載から捉え、個人の目標や課題、その解決状況などの情報を得るようにする。

表1 教師が行う学習状況の見取りと評価

<p>【何を】</p> <p>①知識・理解、②思考・判断・表現、③主体的に学習に取り組む態度（学びに向かう力・人間性）</p> <p>【どのように】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共感的に、肯定的に、具体的に行う。 ・伝達性、生徒と教師の双方向性を大切に行う。
<p>【フィードバックの事例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なりきってるね、気持ちまで伝わってくる。 ・ピタッと止まってる。この静寂がかっこいい。 ・今日の目標は何だっけ？ そう、それが大事だね。 ・アイデア独創的！ どこを強調するの？ なるほどね。 ・「それいい！」と言うのいいね。皆をやる気にしてる。 ・仲間から出たアイデアはすぐに動いて試してみよう。

3. 生徒による学習評価

生徒による評価には、自己評価、相互評価がある。評価を行うことによって自己の学習状況を理解し、その解決にむけて具体的目標をもって意欲的に取り組むことができる。表2は学習カードを用いて評価する例である。毎時間の共通目標として掲げられた具体的な評価の観点①②③④⑤⑥について自己評価を行う。どのような技能を大切に学習するのか、どのように学習するのが明確になることで、よりよい学習が期待できる。

一方、生徒の相互評価を生かすことで仲間との信頼性を高め、意欲的に目標を実現していくことができる。見せ合いの際には本時の目標に照らして「よいところ」について具体的に意見交換したり、「一言メッセージカード」でコメントをもらったりすることで、喜びを感じたり自分のよさを確認したりすることができ、大きな自信になる。反対に評価する立場になることによって、仲間の動きやアイデア、グループを盛り上げる関わり方など、よさを捉える力や仲間に関心をもち大切に思う態度が高まることがわかっている³⁾。

表2 学習カードによる評価欄の工夫

目標と評価の欄 (6観点について4段階で評価) ①本時の学習目標や技能の要点が理解できた (知識) ②全身を使って精一杯大きく踊ることができた (技能) ③動きや群構成、展開を工夫できた (思考・判断) ④良い動きを見分けることができた (思考・判断) ⑤自分のアイデアや気づいたことを発言した (表現) ⑥積極的に取り組み仲間と協力した (主体的な態度)
一言メッセージカード欄 (付箋紙を用いて) 毎時間学習者相互に「よいところ」を見つけて書き留めた「メッセージカード」をプレゼントし、受け取ったものを学習カードに貼る。メッセージカードは作品の相互評価でも活用できる。

4. 学習評価と評定の具体

表3はダンスの目標に準拠した評価規準の設定例(筆者作成)である。これらについて、A「十分満足できる」状況、B「おおむね満足できる」状況、C「努力を要する」状況に区別して評価する。評価は、毎回の授業ではなく原則として単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、その場面を精選することが重要⁴⁾とされている。

例えば、「知識・技能」については単元全体の目標とは別に、1単位時間の目標(創作ダンスの例:ひと流れの動きにまとめる、メリハリを付けて動く、群の構成を工夫するなど)を設定し、本時において何ができるようになればいいのかの重点を提示することで、生徒と教師の目標(ねらい)とともに評価の観点を焦点化することが有効である。これらの積み重ねから観点別評価を行うとよい。

評定については、目標に準拠した観点別評価規準に照らして評価した結果を、さらに5段階評価で総括する。具体的には観点別学習状況の評価結果を得点化し、合計点から5段階に評価にする⁴⁾。

【引用・参考文献】

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」2016
- 2) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価のあり方について(報告)」2019
- 3) 松本富子「ダンス領域における課題解決学習の再評価」『H16～18年度科学研究費(基盤研究(C))研究成果報告書』2007
- 4) 文部科学省初等中等教育局長「小学校児童指導要録、中学校生徒指導要録、高等学校生徒指導要録の改善等について(通知)」及び「(別紙2)中学校及び特別支援学校中学部の指導要録に記載する事項等」2019

[松本富子・中村恭子]

表3 ダンスの観点別学習状況の評価規準の設定例(中学校第1学年及び第2学年)

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・ダンスの特性や由来について、学習した具体例を挙げている。 ・表現の仕方について、学習した具体例を挙げている。 ・関連して高まる体力について、学習した具体例を挙げている。 ・創作ダンスでは、多様なテーマから表したいイメージを捉え、動きに変化を付けて即興的に表現したり、変化のあるひとまとまりの表現にしたりして踊ることができる。 ・フォークダンスでは、日本の民踊や外国の踊りから、それらの踊り方の特徴を捉え、音楽に合わせて特徴的なステップや動きで踊ることができる。 ・現代的なリズムのダンスでは、リズムの特徴を捉え、変化のある動きを組み合わせ、リズムに乗って全身で踊ることができる。	・自分の興味や関心に合ったテーマや踊りを設定している。 ・課題に応じた練習方法を選んでいる。 ・自分や仲間と考えた動きやアイデアを他の仲間に伝えている。 ・発表等の場面で、仲間の良い動きや表現などを指摘している。	・ダンスの学習に積極的に取り組もうとしている。 ・仲間の学習を援助しようとしている。 ・交流などの話合いに参加しようとしている。 ・一人一人の違いに応じた表現や役割を認めようとしている。 ・分担した役割を果たそうとしている。 ・健康・安全に留意している。